

## 第1回 国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会 議事録

日時：令和4年9月7日（水） 15:00～17:10

場所：仙台国際センター展示棟 会議室3

### ○司会

それでは、定刻となりましたので、ただいまから第1回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会を開催させていただきます。

私は、本日の進行を務めますまちづくり政策局防災環境都市推進室の佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

初めに、資料の確認でございます。

本日の資料は、座席表、次第、資料1から5及び参考資料となっております。資料の不足がございましたらお申しつけください。

今回、資料1記載の皆様は委員をお引き受けいただいております。

皆様の机の上に、本懇話会委員の委嘱状を置かせていただいております。本委嘱状をもって委員の皆様への委嘱に代えさせていただきたいと存じますので、ご了承のほどお願い申し上げます。

なお、本日は、垣内恵美子委員、港千尋委員、渡邊享子委員から欠席のご連絡をいただいております。

次に、資料2をご覧ください。

本懇話会の設置、運営に関する事項を定めた要綱でございます。

要綱は、皆様にあらかじめ送付させていただいておりますが、本懇話会の検討事項、会の成立要件等を定めたものでございます。

会の成立に関しまして、本日は、7名の委員にご出席いただいておりますことから、要綱第4条第2項に規定する定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、郡市長からご挨拶申し上げます。

### ○郡市長

座ったままで失礼をいたします。

本日は、大変ご多忙の中を皆様方にご出席賜りましたこと、まず御礼を申し上げます。それから、皆様方には、このたびの委員を快くお引き受けいただきましたことにつきましても、心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

本市では、長年にわたって、音楽の都「楽都」を象徴する文化施設の整備が望まれてきたところでございます。国内外の優れた文化芸術を最高の環境で体験できるとともに、市民の皆様方が多様な活動を展開する文化芸術の総合拠点としての音楽ホール、そして防災環境都市ならではの災害文化創造を目指す中心部震災メモリアル拠点、このたび、この2つの拠点を複合整備することといたしました。新たな交流を生む文化創造発信拠点として整備をしたいという強い思いでございます。

あの11年前の東日本大震災におきまして、音楽をはじめとする文化芸術が人々の苦しみに寄り添って、そしてそれを癒やし、共に共感できる輪を広げることで、立ち上が

る力というのを呼び起こしてくれたと思っております。このことを通じて、文化芸術の多様な価値や、また、社会に果たす意義の大きさというのが改めて認識をされまして、音楽ホールの整備に向けた機運が一段と高まることとなりました。そうした動きを背景にいたしまして、平成31年3月には、仙台市音楽ホール検討懇話会から本市に対して音楽ホールを整備する際の方向性が示されました。

そしてまた、令和2年10月には、仙台市中心部震災メモリアル拠点検討委員会から中心部に整備をするべきメモリアル拠点の在り方が示されまして、災害を乗り越える術である災害文化というのを創造して継承していく、市民一人一人の暮らしに生かしていく、このことの重要性についてご報告をいただいたところでございます。

文化芸術と災害文化、これはともに、これからの社会をよりよく生きていくために大きな役割を果たすものでありまして、その総合拠点として複合整備する意義は非常に大きいと私自身感じているところでございます。

委員の皆様方におかれましては、本懇話会に先立ちまして、その複合施設の立地場所であるせんだい青葉山交流広場を含むこの青葉山エリアをぜひご視察いただきたいと思っておりましたんですけれども、あいにくの雨になりました。高いところから、見晴らしのいいところからご覧をいただきまして、事務局からの説明もさせていただいたと報告を受けております。

この地域は、仙台藩祖伊達政宗公がまさしく仙台のまちを開いた「はじまりの地」でございます。本市にとっても大変重要な地域でございます。仙台城跡、国際センター、学術機関、博物館、広瀬川など、多くの資源が集積する国際文化交流拠点でもございます。私たちは、今、この場所から、この地から仙台の未来を見据えて歩みを進めようとしているわけでございます。

仙台の新たなシンボルとなり、市民の皆様にも末永く愛される複合施設整備を実現させてまいりたいと強く考えておりますので、どうぞ委員の皆様方におかれましては、関連にご議論を賜りますよう冒頭何とぞよろしくお願い申し上げます。私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### ○司会

続きまして、委員の皆様をご紹介させていただきます。

恐縮ではございますが、私からお名前を申し上げますので、委員の皆様におかれましては、その場に着席のまま、お一人につき1分程度で簡単に自己紹介をお願いいたします。

それでは、資料1の名簿順ということで、初めに、遠藤智栄委員、お願いいたします。

#### ○遠藤委員

皆様、こんにちは。遠藤智栄と申します。

地域社会デザイン・ラボで、市民が地域をデザインしたり、あとは市民発のプロジェクトとか活動をつくったりしながら、まちや地域をデザインしていこうという活動をしております。

私はメモリアルの検討委員もさせていただいておりまして、本江先生はじめ、皆さんと一緒に議論をさせていただきました。また、東日本大震災以降、被災地や復興支援の

活動もさせていただいております、今もこの3月に起こった福島県沖地震の復興支援の活動なども細々とさせていただいております。

ですので、どちらかといえば、ちょっとメモリアル寄りな、復興寄りな発言になるかもしれませんがけれども、やっぱり命と、そしていろんな方々の記憶ということをちょっと大事にしながら発言をさせていただこうと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

○司会

それでは、梶奈生子委員、お願いいたします。

○梶委員

梶奈生子と申します。どうぞよろしく願いいたします。

日頃は、東京都の上野駅前にございます東京文化会館という文化施設、音楽施設で、主に主催事業の企画、制作、運営を担っております。そのほかにも、貸し館の運営ですとか、あと音楽資料室を持っておりまして、その運営も全体を見ている立場でございます。

東京文化会館といいますと、皆さん、ご存じの方はよく、そうですね、海外からの一流のバレエとかオペラを上演しているところだと、ちょっと敷居が高いなと思われるようなこともたくさんあるかと思うんですが、この10年、どちらかというところ、人材育成ですとか、あと教育普及、社会包摂、そして創造発信ということで3つの柱を立てまして、主に育てた人たちを活用した事業を展開してまいりました。そのような経験が、今度新しい施設をつくるに当たりまして、何かお役に立てるんじゃないかと思っております。お役に立てるといいなと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○司会

それでは、川内淳史委員、お願いいたします。

○川内委員

皆さん、こんにちは。川内と申します。

私は、東北大学災害科学国際研究所に勤めておりまして、専門は歴史学を専門としております。主に、ですから、災害の歴史もそうですし、あと最近だと、コロナとの関係で、感染症の歴史も含めた、広く言うと、人が生きてきた歴史というものをテーマに研究をしております。

それと同時に、災害とその資料の関係ということで、例えば2003年に、東北大含めて、在仙の歴史研究者を中心に、市民と研究者で災害から歴史資料、古文書等を救済するというNPO法人宮城歴史資料保全ネットワークという団体がございまして、その事務局長をしておりますし、また、東北大学に着任する前は実は神戸大学のほうにございまして、阪神・淡路大震災に関わるそういう記録資料、そういうものの保存に関する研究とか、そういう災害で資料が失われる、ないしは災害から資料が生まれてくる、そういうものをどのように後世に伝えていくかという観点からの研究や活動というのをしております。

そうした今回の中心拠点と複合施設ということで、中心拠点の、先ほどの遠藤先生のお話にもありましたが、提言の中にはアーカイブ機能という話もありましたが、そうい

う災害のアーカイブですとか、あとその歴史という点から今回の施設についていろいろ意見を述べさせていただければというふうに思っております。どうぞよろしくお願いたします。

○司会

それでは、今野薫委員、お願いいたします。

○今野委員

仙台商工会議所の今野と申します。

商工会議所、お分かりにならない方もいらっしゃるかもしれませんが、地域地域にございまして、それぞれの地域の経済発展、これがやはり第一の仕事というふうなことになります。どちらかといいますと、いろんな経営者の方々が集って、いろんな意見を言っていただいて、それを行政の方々だとかに要望活動を行っていくというようところが一番大きな活動になっております。

実は、この音楽ホールにつきましては、随分以前から、いろんな経済界の関係の方々がそれぞれたくさん意見を持っております。そのご意見を代弁するという立場にはございませんが、やはり地域の活性化をどういうふうに図っていくのか、そのためにこの施設がどういうふうに機能していただくのが一番よろしいのか、そういう視点で発言させていただければと思います。どうぞよろしくお願申し上げます。

○司会

それでは、佐藤淳一委員、お願いいたします。

○佐藤委員

皆様、こんにちは。佐藤淳一と申します。

私は、今、尚絅学院大学で幼児教育のほうの先生になる人たちに音楽を教えておりまして、それから自分自身も演奏活動をさせていただいております。仙台オペラ協会というところの芸術監督というような立場におります。今回は、梶先生も音楽のほう、それから本杉先生もお詳しいと思いますが、実際に実演者といいますか、演奏者として仙台で歩んできたそのことをこの会議の中でお話をさせていただけると、私がここにいる意味があるのかなというふうに思っております。

合唱連盟と吹奏楽連盟と、それから音楽の力による復興センターと仙台オペラ協会とで、いつでしたかね、2015年ですかね、「楽都・仙台に復興祈念『2000席規模の音楽ホール』を！」という市民会議を立ち上げたときから、このホール関係には関わらせていただいております。

何かそんな代表的なことができるかどうか分かりませんが、地元の音楽家の代表として、いろんなことをお話しさせていただければというふうに思っています。どうぞよろしくお願いたします。

○司会

それでは、本江正茂委員、お願いいたします。

○本江委員

本江でございます。どうぞよろしくお願いたします。

私は、東北大学の工学部で都市・建築学専攻、ふだんは建築の設計のことを学生に教

えているという立場でございます。

震災のときに東北大学が一番大きい被害を受けた組織の一つで、その後の建て直しを当時やってきたということもございまして、あとその後、様々なご縁がありまして、仙台市のももとの震災復興メモリアル等検討委員会、2013年からですかね、のものにも交せていただいて、その後、荒井駅のところの3.11メモリアル交流館という、これについては、デザイナーとして、具体的にどういうものをつくるかと、実際に展示されてありますものをまとめるというようなことをさせていただいて、それもあって、この直前の野家先生の中心部震災メモリアル拠点検討委員会にも交せていただいて、そのお話をさせていただくようになりました。

なので、震災の後ずっとメモリアル関連のことで仕事を振っていただいて、できる限りのことをしてきたつもりではございますが、その上でこうして、ようやくと言っていると思いますけれども、中心部のメモリアルの拠点の整備のことが具体化するという、しかも音楽ホールと一体でというところは、非常に面白いことになってきたと、いい意味でそう思っています。

なので、ポジション的にはメモリアル側の人という感じなんですけれども、でも本職は建築の設計でございますので、久しぶりに建つ大きな公共建築でして、仙台が、メディアテークだけじゃなくて、またすばらしい建築を持つ都市になるというチャンスだと思います。その意味では単にメモリアル側じゃなくて、よい複合建築、新しいタイプの複合建築がこの都市に生まれる。それに立ち会うことができるのは大変にわくわくする機会だと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○司会

それでは、本杉省三委員、お願いいたします。

○本杉委員

本杉です。よろしくお願いいたします。

私も、今隣に座っていらっしゃる本江さんと建築という分野では一緒なんですけれども、特に劇場とかホールとかの研究、そして設計とか計画に携わってまして、本計画においては、2017年から2019年ですかね、2年間にわたって音楽ホールの検討委員会が行われてきましたけれども、その座長的な立場で参画させていただきました。

私が、仙台といいますか、東北の方面に最近足しげく来ることになったんですけれども、そのきっかけは東日本大震災でして、ちょうど地震があった後、仙台の研究仲間の後輩に連絡して、行きたいんだけどという話をしまして、彼らの案内で、3泊4日か4泊5日だったか、電車が動くとすぐに来まして、あちこち被災地に行きました。真っ先に行ったのが石巻で、彼が案内してくれたのが石巻で、その後、石巻で新しいホールを造りましたけれども、10周年で、その計画にも携わらせてもらいました。

つくづく感じたのは、やはり芸能がすごい盛んだということは、東北の大きなエネルギーだなと。もちろん音楽という意味で、非常に幅広い、舞台芸術、芸能等関わるわけで、そうした宝庫だということを改めて強く震災以降感じるようになりまして、いろいろできた知人とか友人を頼りながら、いろいろな郷土芸能なんかも見るようになりました。

検討委員会のほうでは、後でお話しになると思いますけれども、ぜひ創造的なホール、文化芸術を創造的に市民の活動の中に染み込ませていくような、そういう施設を、そういう活動を中心にした施設をつくっていこうという理念の下に、各委員、私も含めて、みんなが協力してアイデアを出し合ったように思います。それが一步一步前進して、今日のような形でまた新たにスタートを切れるということは大変うれしく思います。

非常に、何ていいますかね、よく言うと丁寧に、ちょっと、どちらかという、もしかしたらのんびりだと言う人もいるかもしれませんが、やっぺらっぺらという意味で、この着実な歩みを一步一步踏み固めながら、ぜひすばらしい活動と施設建築ができるよう、私も及ばずながら協力できればいいなというふうに思っています。ぜひよろしくをお願いします。

○司会

なお、本日ご欠席の垣内委員、港委員、渡邊委員のお三方につきましては、次回懇話会の際に改めてご紹介させていただきます。

次に、事務局を紹介いたします。

先ほどご挨拶申し上げました仙台市長の郡でございます。

音楽ホール整備を担当しております文化観光局長の金子でございます。

文化観光局次長で音楽ホール整備推進担当の中山でございます。

文化観光局次長の高島でございます。

文化スポーツ部長の大森でございます。

文化振興課文化企画推進担当課長の佐々木でございます。

交流企画課長の市川でございます。

続きまして、中心部震災メモリアル拠点整備を担当しておりますまちづくり政策局長の梅内でございます。

まちづくり政策局次長の柳津でございます。

防災環境都市推進室長の高野でございます。

震災メモリアル事業担当課長の田中でございます。

次に、本懇話会の運営について確認をさせていただきます。

懇話会の公開、非公開についてですが、仙台市におきましては、公開が原則になっておりますので、会議は原則公開とし、審議の中で非公開とすべき部分が出てまいりましたら、その都度皆様にお諮りして決めていくということでよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○司会

それでは、そのようにさせていただきます。

次に、議事録の作成でございます。

事務局が作成した議事録の案について、毎回、お二人の委員にご確認、ご署名をいただいて議事録とし、本市ホームページ等で公開するということがよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○司会 議事録にご署名いただく委員は持ち回りとし、今回に関しましては、名簿順で、遠藤委員、梶委員をお願いしたいと存じますが、両委員、よろしいでしょうか。

(発言の声なし)

ありがとうございます。

その他運営に関する事で、皆様から何かご意見はございますか。

(発言の声なし)

○司会

それでは、ただいまより本日の議事に入ります。

これからの進行につきましては、市長をお願いいたします。

○郡市長

それでは、よろしくお願ひ申し上げます。

初めに、この懇話会の目的、スケジュールなどにつきまして、また事務局から少し説明をさせていただきたいと思ひます。

では、事務局、お願ひいたします。

○事務局(佐々木文化企画推進担当課長)

それでは、私のほうから資料の説明をさせていただきます。

資料3をご覧ください。

1、本懇話会の目的についてでございます。

3段落目でございますように、この懇話会は、複合施設の基本構想を本市が策定するに当たりまして、複合施設としての理念や事業の在り方などにつきまして、有識者の皆様からのご意見を踏まえた検討を行うために設置をするものでございます。

次に、2番、懇話会の議事内容についてをご覧ください。

当懇話会につきましては、ご覧のとおり全6回の開催を予定しております。本日の1回目の懇話会の内容を踏まえまして、2回目は10月から11月にかけて開催し、本日はいただいたご意見を基に、複合施設としての理念や青葉山エリアに立地する施設としての在り方などにつきましてご意見を賜りたいと考えております。

3回目につきましては、来年の1月から2月に開催し、各構成施設の想定概要や呼称、複合施設としての事業の在り方などにつきましてご意見いただきたいと考えております。以降、4回目以降は令和5年度に開催し、来年の夏から秋頃にかけての基本構想策定を目指してまいります。

次に、3番、市民意見聴取の機会についてでございます。

まず、基本構想の策定までに複数回シンポジウムを開催してまいりたいと考えております。1回目につきましては、本日、机上にチラシを配付いたしました。9月25日に青葉山エリアに関する市民シンポジウムの開催を予定しているところでございます。

また、市のホームページ上で常時、市民意見を募集するとともに、中間案ができた際には市民説明会の開催も考えているところでございます。

このほか、地元の文化芸術団体など関係者ヒアリングを適宜実施いたしまして、寄せられたご意見はこの懇話会でも報告したいと考えております。

資料3についての説明は以上でございます。

○郡市長

ただいま、本懇話会の目的や想定されるスケジュールについてご説明をさせていただ

きました。

この件につきまして、何か皆様からご意見、ご質問はございますでしょうか。

(発言の声なし)

○郡市長

よろしいですか。

では、なければ、次に入らせていただきます。

複合施設整備に係るこれまでの経緯、取組などにつきまして、もう懇話会の皆様方には、いろいろとご協力もいただいたものですから、ご承知のこととは思いますが、改めて各担当局から説明をさせていただきます。

なお、説明量が多くなりますけれども、ご意見、ご質問につきましては、資料一括説明の後をお願いしたいと存じますので、よろしくお願いたします。

では、説明をお願いします。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは、資料4-1をご覧ください。

こちらの資料は、各構成施設に関するこれまでの主な経緯をまとめた資料となっております。

左側に音楽ホール、右側に中心部震災メモリアル拠点の経緯を記載しております。これまでそれぞれ別々の施設として検討してまいりましたが、今般、複合整備をすることとしたということが年表形式で分かるような資料としております。

まず、左側の音楽ホールについてでございます。

仙台市では、平成の初期に音楽堂構想がありましたものの、財政上の理由により整備を断念した経過がございます。しかしながら、この間も楽都・劇都としての文化芸術活動は活発に行われてきたところでございます。

平成23年の東日本大震災後、復興の過程の中で文化芸術が大きな力を果たしたことをきっかけに、音楽ホール建設の機運が高まってまいりました。具体的には、震災直後、音楽の力による復興センターの設立、音楽ホール建設基金の創設や、2,000席規模の音楽ホール建設を求める市民会議が設立されるなどの動きがございました。また、経済同友会からは、文化施設建設を求める提言やクラシック音楽専用ホールを求める提言などもいただいております。このほか、劇場法や文化芸術基本法が成立するなど、国レベルでも大きな動きがあったところでございます。

そうした流れを受けまして、平成31年には仙台市音楽ホール検討懇話会から報告書が出され、本格的な検討が再スタートして今に至るところでございます。

○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

続きまして、資料右側、中心部震災メモリアル拠点についてでございます。

本市は、過去より数々の災害を経験しつつも、それらを乗り越えてまいりました。また、様々な社会的な課題を市民協働で克服してきたまちでもございます。

平成23年、東日本大震災が発災。同年11月には仙台市震災復興計画を策定し、この復興の基本理念において「新次元の防災・環境都市」の構築が掲げられました。平成27年には第3回国連防災世界会議が仙台で開催、そこで仙台防災枠組2015-2030が採



択されます。平成29年3月11日には議員提案による仙台市防災・減災のまち推進条例が施行されます。本市を挙げて、防災環境都市づくり、防災・減災の取組を推進してまいりました。

震災メモリアル事業につきましてでございますけれども、こちらも平成23年11月の仙台市震災復興計画がその端緒となります。

こちらにつきましてですが、後の資料4-3で経過の詳細についてご説明申し上げますので、ここでのご説明は割愛させていただきます。

以上でございます。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは次に、資料4-2をご覧ください。

こちらの資料は、音楽ホールに関するこれまでの経緯を先ほどの年表からより詳しく説明した資料となっております。

まず、左上の仙台市の文化芸術のあゆみについてでございます。

これまで仙台では、楽都仙台、劇都仙台の取組として、官民双方により活発な活動が行われてきました。

例えば、今年も開催されました仙台国際音楽コンクールや、毎年秋に開催されます仙台クラシックフェスティバル、また、今週末に3年ぶりに開催されます定禅寺ストリートジャズフェスティバルなど、町全体が音楽で包まれるイベントがこれまで仙台で開催されてきたところでございます。また、楽都仙台の象徴とも言えるプロのオーケストラとして、仙台フィルハーモニー管弦楽団がでございます。

震災からの復興の過程では、文化芸術の力が再認識されたところであり、音楽の力による復興センター・東北による復興コンサートは、この4月に1,000回を達成したところでございます。

このほか、文化力を社会に生かす取組として、教育や福祉と連携した事業を様々行っているところであり、とっておきの音楽祭のように、仙台で生まれた音楽祭もでございます。

国の動向の変化もありまして、そうした動きを踏まえまして、資料中央にありますように、音楽ホール検討懇話会を設置いたしまして、仙台に望まれる音楽ホールについて、有識者の皆様から様々ご意見をいただいたところでございます。

詳細な説明は割愛いたしますが、資料真ん中のところですが、施設構成につきまして、大ホールが2,000席規模の生の音源に対する音響を重視した高機能多機能ホールとされたところでございます。

また、必要な建築面積や延べ床面積についても資料下部のところに記載がありますので、ご覧いただければと思います。

その隣が懇話会報告書以降の取組を掲載しております。

老朽化した宮城県民会館を建て替えることが決まり、新しい県民会館については、2,000から2,300席程度の電気音響を重視したホールを整備する予定でございます。

また、令和2年には音楽ホールの需要想定調査を行いまして、大ホールでは270日程度の利用が想定されるとの調査結果を得ており、県と市で2,000席規模のホールを整備

しても、十分な需要が見込めることをこの段階で確認しているところでございます。

このほか、新型コロナウイルスの蔓延により社会経済環境の大きな変化がございましたが、現在はほぼ支障なく公演が行われており、また、デジタル技術が急速に普及したことによりまして、オンライン配信などの新たな形式が文化芸術の領域でも活用されているところでございます。

資料4-2につきましては以上でございます。

○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

続きまして、資料4-3にお移りください。

私から、改めまして、中心部震災メモリアル拠点に係るこれまでの経緯や検討状況についてご説明を申し上げます。

東日本大震災が発災。11月に策定いたしました震災復興計画の100万人の復興プロジェクトの一つに震災復興メモリアル事業を位置づけました。その後、本事業を具現化するため、仙台市震災復興メモリアル等検討委員会を設置し、同委員会の報告書が平成26年12月にまとめられました。

ここでご説明したいポイントは2点でございます。

まず、黒丸の2つ目、震災メモリアルに取り組む意義として3点掲げてございますが、下線を引いております「明日へ向かう力を育てる」についてでございますが、この詳細、下の矢印にございますけれども、文化芸術の力による創造、これが震災の記憶と経験を未来へ、世界へつなぐ力となるとされているという点でございます。

2点目は、その下でございますけれども、拠点整備による事業展開といたしまして、中心部と沿岸部の2つの拠点を整備することが有効とのご提言をいただいたことでございます。

本報告に基づきまして、平成28年2月には沿岸部拠点でございます「せんだい3.11メモリアル交流館」を開館。その後、震災遺構といたしまして、平成29年4月から荒浜小学校、令和元年8月から荒浜地区住宅基礎の一般公開を行ってまいりました。

なお、その右側でございますけれども、せんだいメディアテークにおきましては、平成23年5月に、3がつ11にちをわすれないためにセンター、通称わすれん！が立ち上がりまして、震災に関する映像記録等の保存や発信などの事業を行っております。

その後、中心部拠点の在り方や取組などについての検討のため、仙台市中心部震災メモリアル拠点検討委員会を設置し、同委員会の報告書が令和2年10月にまとめられました。

資料右側に移りまして、施設像の概要についてでございます。

まず、中心部の基本理念でございますが、災害とともに生きる文化である災害文化の創造でございます。

災害文化とは、災害は発生するものと認識し、災害が起きても、乗り越える術を持った社会文化の呼称とされてございます。

その下の概要図についてでございますけれども、概略を申し上げますと、まず東日本大震災、これを現代社会の課題や脆さを見直し、持続可能な未来の社会を考える重要な契機の一つと捉え、時代や地域にふさわしい形で災害を乗り越える知恵や技術をつくり

出していくこと。そこに仙台の特性である市民力、拠点性、知的・経済的資源を生かし、仙台ならではの災害文化を創造・継承していくことが被災地最大の都市としての責務であること。さらに、先駆的な都市モデルを形づくり、国際的な防災ネットワークの中心として、人類のよりよい未来への貢献を目指すことがこの主な内容でございます。

次に、この基本理念の下、本拠点の取組として、ご覧の4つの柱をお示しいただきました。

さらに、これらの取組を展開するために、樹のように、記憶の拠り所といたしまして想像と創造とを喚起する仕組みが必要とされております。そちらが①から③でお示ししてございますが、まずはアーカイブ機能などによります記憶の根、展示などの表現や表象による継承の幹、そして3番、交流やにぎわいなどによる創造の枝でございます。

最後に、ここまでを踏まえました本拠点に対する本市の考え方は、一番下の3点でございます。まず、東日本大震災のみならず、その他の自然災害等も対象としていくこと。2点目、未来志向の拠点であること。そして最後、3つ目といたしまして、展示や伝承活動のみにとどまらない災害文化創造のためのソフト事業や専門的支援機能を備えることでございます。

資料4-3については以上でございます。

引き続き、私から資料4-4についてご説明を申し上げます。

最後に、両施設を複合整備することとした理由、加えまして、青葉山交流広場を立地場所として選定した理由につきましてご説明を申し上げます。

まず、資料左側、1、両施設を複合整備することとした理由でございます。

音楽ホールは、復興の過程で音楽が発揮した大きな力を受け、建設の機運が高まった文化芸術の創造発信の拠点を目指すものです。

次に、メモリアル拠点は、震災の経験と教訓を継承・発信しつつ、災害文化の創造発信の拠点を目指すものでございます。

さらに、メモリアル拠点の報告書におきましては、他施設との一体的な整備などの検討の必要性もお示しいただいたものでございます。

こうした共に震災を契機とするという両施設の親和性の高さ、これらを複合化することによる復興のシンボルというメッセージ性の強化、さらには諸室等の共通化によるコスト削減効果、これらを踏まえ、両施設の複合化による整備を目指すことといたしました。

次に、青葉山交流広場を選定した理由でございますけれども、まず資料左下をご覧ください。そちらに本敷地の基本情報をお示ししてございます。

概要はご覧のとおりでございますけれども、本敷地の面積につきましては約1万9,200平米、先ほど視察の際に委員からご質問を頂戴いたしました、東西が約108メートル、南北が約178メートルになってございます。また、この敷地でございますけれども、川には、ちょっと崖地がございまして、直接そちらに下りることはできないようなつくりとなっております。

アクセスにつきましては、先ほどもご覧いただきましたとおり、東西線の国際センターが最寄り駅となっておりますのでございます。

あと、用途等につきましては、資料に記載のとおりでございます。

なお、現在でございますけれども、駐車場として利用のほか、イベント時や大規模学会時にはテントの設置場所としても活用をされておるところでございます。

それでは、資料上に戻りまして、改めて2の選定理由についてでございます。

まず、音楽ホール検討懇話会報告書では、当広場は候補地の一つとされ、その利便性の高さや将来性などに触れていただいております。

また、メモリアル拠点検討委員会報告書におきましては、その立地要件といたしまして、都市のアイデンティティーを象徴的に示す場所が求められておるところでございます。

これらを踏まえ、この青葉山エリアを見てまいります。

なお、ここで、前方スクリーンに関連する映像を今よりお流しいたしますので、お手元の資料と併せてご参照ください。

まず、当エリアは、仙台開府の地でございます。

画像は、明治初期に描かれたこの地の絵図、仙台城の絵図でございます。このエリアは、本丸と二の丸に近接いたしまして、仙台藩の重臣の屋敷地が置かれた場所でございます。

画面の下でございます。赤線で囲っておる部分がこの整備予定地でございます。江戸時代には、政宗の弟の血筋を汲みます大條家の屋敷が置かれておりました。こちらが今の交流広場でございます。

なお、ご覧いただくとおり、下側のほうでございますけれども、杜の都の原風景でございます。武家屋敷の屋敷林が色濃く茂っていることがお分かりいただけるかと思えます。

さらに、文化、学術、自然といった資源が当エリアは集まる場所でもございます。

スクリーンは、昭和3年に開催されました東北産業博覧会の絵図でございます。絵の中に点線で、国際センター駅、現在の場所をお示ししております。当時、仙台市の人口が約17万人と言われておる中、観客50万人を集め、当時の世界的不況の中、本市に大いににぎわいをもたらしたイベントでございます。

画面は現代に戻ります。先ほど皆さんとちょっと一緒にご覧いただきかけたところでございますけれども、こちらが大手門側からの眺めでございます。画面の真ん中に国際センター駅が映ってございますけれども、この後ろにこの複合施設が建つこととなります。周辺の緑と都心部のビル群が同時に視野に入ることとなります。

次は、逆サイドに移りまして、仲の瀬橋側から見た絵でございます。画面左側でございますけれども、東西線の線路が上のほうに延びているのがお分かりいただけるかと思えます。そこからずっと真ん中のほうに寄っていきまして、白い屋根が見えるかと思えます。こちらが国際センター駅と当会場をつなぐ屋根つきの動線でございます。さらに真ん中に寄りますと、ちょっと屋根が見えるかと思えます。そちらが先ほど委員の皆様とご視察の際に立ち寄らせていただきました国際センター駅2階、青葉の風テラスでございます。

この右側、ちょうど画面の本当に真ん中辺りがこの交流広場となっております。ご

覧のとおり、手前には広瀬川、さらに奥、若干小さくて分かりにくいかもしれませんが、東北大学のキャンパスが広がっておる土地、それらが眺められる景色となっております。

次に、本敷地でございますけれども、十分な敷地と優れたアクセス性を持つエリアでございます。

写真は、荒井行きを眺めるご家族連れの写真です。国際センター駅でございますけれども、沿岸部につながる荒井行きと、仙台藩が大切に育ててまいりました御裏林を駆け上ってまいります八木山行きがクロスいたしまして、同時に発車する駅でございます。ですので、電車ビューとして、人々が足を止める絶好のスポットとなっております。

次に、先ほど視察の際に立ち寄りました駅2階の青葉の風テラスでございます。ご覧のとおり、人々の集いや、くつろぎのスポットとなっております。

こちらの写真でございますけれども、人々が家路に着く夕方の写真でございます。そして、さらに時が過ぎまして、夜のとばりが仙台に下りてまいりました。

将来、この写真の左側に、この青葉山エリアと、さらにはその先でございます市外を照らすであろうもう一つの灯かりであります本複合施設が生まれることとなります。

最後に、本エリアの全体図です。

近接する大学、国際センター、博物館や美術館等との機能面、会場面、事業面での連携も期待できるエリアです。さらに、全国都市緑化フェアの開催や仙臺緑彩館の整備、大手門復元に向けた調査検討など、魅力向上に向けた取組が進行中でございます。

資料に戻りまして、こうした青葉山エリアが持つ特性、将来性を鑑み、さらには建設に係る技術的な要件、これも考慮いたしまして、この青葉山交流広場を複合施設整備の最適地と判断するに至ったものでございます。

また、これまでのご説明に加えまして、本年度中に、青葉山エリアの価値や魅力向上等に向けた方向性を示す青葉山エリア文化観光交流ビジョンを策定予定でございます。これを踏まえた交流人口拡大の取組も期待されるところでございます。

青葉山ビジョンの策定の懇話会でございますけれども、去る8月30日に第1回目が開催されたところでございます。こちらの懇話会とビジョンの懇話会、この両懇話会で相互に情報共有を図りながら、双方が整合を取れた内容となるように鋭意図ってまいります。

続きまして、一連の資料のご説明の締めくくりといたしまして、青葉山エリア文化観光交流ビジョンにつきまして、お手元、後ろにございます参考資料3に基づきまして、交流企画課長よりご説明申し上げます。

#### ○事務局（市川交流企画課長）

それでは、参考資料3に基づきましてご説明いたします。

初めに、1の趣旨についてでございます。

先ほど来ご説明させていただいておりますとおり、この青葉山周辺は、仙台はじまりの地とも言えるエリアでございます。多くの資源が集積し、また、今般の両施設の複合整備など、様々なプロジェクトが進められております。この機会に改めて、このエリ

アの価値や魅力、回遊性の向上に向けた方向性を示すビジョンをおおむね10年後を見据えながら策定いたしまして、交流人口の一層の拡大を図ってまいりたいと考えております。

2のビジョンの概要でございますけれども、エリアの範囲とビジョンの構成案につきましては資料に記載のとおりでございます。ちょうど今スクリーンに映っておりますこの緑がかったところ、ここを今回のビジョンの範囲と考えてございます。

3の想定スケジュールですが、この懇話会を年度内に4回ほど開催いたしまして、市民向けシンポジウムやパブリックコメントを経まして、年度末の策定を予定しております。

ここで、8月30日に開催しました第1回目の懇話会での議論のうち、主な意見を報告させていただきます。主に3点でございます。

1点目、この青葉山周辺は、都心近くにありながら、自然や文化資源もあり、このエリアにしかない特徴をどう生かすかが大きなポイントである。

2点目、仙台のまちづくりの経緯から見ても、このエリアは特別な場所であるということをも前提として議論を進める必要がある。

3点目、このエリアでは、上質な時間、洗練した時間を過ごすことができるというようなストーリーを示していくことが重要で、多様なストーリーを持つエリアとして、様々な方が楽しめるエリアであり、10年後、ここでこんな過ごし方、またはこんなことができるようになっていくというような姿をビジョンとして示していく方法もあるなどのご意見をいただいております。

このほかにも、様々なご意見やご提案をいただいております。現在、議事録をまとめておりますので、後日改めて委員の皆様にも共有させていただきたいと存じます。

参考資料3についての説明は以上です。

○郡市長

今、複合施設整備に係るこれまでの経緯についてご説明を申し上げましたけれども、これまでのところにつきまして、何か皆様方からご質問、ご意見などございますでしょうか。

(発言の声なし)

○郡市長

なければ、次に入らせていただいてもよろしいですか。

これから、この懇話会の目的でございます複合施設としての在り方、また、目指すべき方向性について議論をさせていただきたいと思っております。

まず、また説明で恐縮なんですけれども、音楽ホールについて現時点で考えている目指すべき方向性、必要な機能などについて、恐縮なんですけれども、担当から説明をさせますので、申し訳ございません、お聞きいただきたいと思います。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは、資料5の左側をご覧ください。

音楽ホールの目指す方向性といたしましては、仙台の文化芸術の総合拠点と考えております。

具体的には、以下3点挙げさせていただきました。

まず1点目は、「楽都仙台」を象徴する実演芸術の拠点という点でございます。

音楽はもちろんのこと、オペラやバレエなど多様な実演芸術につつまして、これまで仙台では開催できなかった公演や活動が可能となり、仙台だけではなく、東北の文化芸術を牽引する拠点としてまいりたいと考えております。

また、プロの方だけではなく、市民の方にも幅広く使っていただきまして、仙台ならではの文化の創造発信を行う拠点、また、仙台フィルや国際音楽コンクールなどの楽都事業を推進する拠点にしてまいりたいと考えております。

次に、2点目として、文化観光交流エリアの新たな核となる拠点を挙げております。

こちらは、青葉山エリアの新たなシンボルとして、周辺施設との連携によりエリア全体の魅力を高め、にぎわいを生む拠点、そして全ての人に開かれた交流の場としての拠点ということでございます。

最後に、3点目として、文化芸術力を社会に生かす拠点を挙げておりまして、文化芸術の持つ力を社会の様々な分野で生かし、単にホール公演だけではなく、アウトリーチ活動やワークショップの開催など、多様なアプローチで文化芸術の力を発揮していく拠点と考えております。

そうした方向性を目指すに当たりまして、必要な機能がその下に掲げた6点と考えております。公演機能や練習・創造支援機能はもちろんのこと、③の交流機能に記載したとおり、誰もが日常的に集い、交流できる機能が必要であると考えております。

これらの機能を実現するための施設として、主要な施設をその下に掲げております。

大ホールにつつましては、先ほどご説明いたしました音楽ホール検討懇話会での報告がベースになると考えておりまして、クラシックのコンサートやオペラ、バレエの上演などをはじめとする生の音源に対する音響を重視した2,000席規模のホールと考えております。

そのほかには、小ホールやリハーサル室、練習室などのほか、広場的空間やワークショップルームなどが必要と考えております。

音楽ホールの説明については以上でございます。

#### ○郡市長

続きまして、右側の中心部震災メモリアル拠点について、現時点で目指す方向性、また、施設として必要な機能など、どのように考えているのかご説明をさせていただきます。

#### ○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

それでは、中心部震災メモリアル拠点につつまして、資料右側に基づきご説明を申し上げます。

本拠点が目指す方向性は、災害文化の創造拠点です。

数々の災害を乗り越え、まちをつくり上げてきた本市の知見や市民力を生かし、防災環境都市・仙台ならではの災害文化を創造、継承、発信し、各地の防災力向上に寄与する拠点、市民が誇る仙台の新たなシンボルとして、多様な主体の交流を通じ、災害文化を市民のものとし、社会に実装する拠点、これらを目指していきたいと考えております。

次に、本拠点の必要な機能案といたしまして、6つの機能をお示ししております。これらは先ほど資料4-3でご説明申し上げました本拠点の仕組みである樹にそれぞれ対応しておるものでございます。

ここで申し上げたい点でございますけれども、真ん中にごございます両施設の機能の連携と融合についてでございます。

ホール、メモリアル、左右のそれぞれの機能を見比べていただきたいのですが、例えば、音楽ホールの①公演機能とメモリアルの②展示機能、⑥シンボル機能、こちらは表現や表象といった意味で類似の機能かと考えてございます。次に、音楽ホールの②練習・創造支援機能とメモリアル④活動支援機能、さらには、音楽ホールとメモリアル、それぞれの③にごございます交流機能でございます。これらの近しい機能につきましては、双方の連携と融合を図っていただける可能性があると考えまして、このような形でお示しをしたものでございます。

最後に、メモリアル拠点の必要なエリア案でございます。

展示エリアやアーカイブエリアに加えまして、災害文化創造エリアとして、多様な主体の交流の場となる広場やスペースが必要と考えてございます。こちらにつきましても、左側、音楽ホールの広場的空間等とスペースの共有化を図ってまいれるのではないかと考えておる次第でございます。

メモリアル拠点部分につきましては以上でございます。

#### ○郡市長

ただいまご説明を申し上げましたのですが、この資料の5の下段について、私のほうからご説明をさせていただきたいと思っております。

私といたしましては、今説明がありましたように、両施設は親和性が高い施設であると考えておりまして、その内容を資料の5の下段に記載しております。

担当から説明がございましたけれども、それぞれの施設の目指す方向性や機能を鑑みましても、結びつきやすい面を持っているんだというふうに考えているところです。

そうしたことから、資料の中段にありますとおり、両施設が連携や融合を図ることで、より魅力的な施設になるのではないかと考えたところでございます。

これらを踏まえまして、複合施設としてのあり方・目指すべき方向性を、資料の最下部、下のほうに書かせていただきました。ご確認をいただきたいと思います。

では、資料5の内容に関しまして、皆様方からご意見を頂戴したいと思います。

最初に、資料5の上段に記載をいたしました音楽ホール、震災メモリアル拠点それぞれの施設の概要に関しまして、それぞれ委員の皆様方のご専門のところ、ぜひご意見をいただきたいと思います。その後、資料の下段についてまた議論を進めてまいりたいと考えますので、よろしく願いいたします。

では、音楽ホール、震災メモリアル拠点それぞれの施設の概要について、順番にお一人ずつお話を伺ってまいりたいと存じます。

初めに、遠藤委員、よろしくお願いいたします。

#### ○遠藤委員

ご説明どうもありがとうございました。



資料5の上段の広いところですよ。

ご説明にありましたように、親和性の高い項目というのは、例えば、そうですね、今年度なども様々な事業をされていると思いますので、もう今からもコラボレーションしながら、両課が連携をして積極的にもう取り組んでいくような部分なんではないかなと思ひまして、とても期待も、施設ができてからというよりは、もう今年度事業から期待したいところです。

そうやって、実際に、人と人、テーマとテーマが結びついていろんなアクションがあることで、できる前に、やっぱり市民の皆さんや遠方からいらっしゃる皆さんもそれをもう体感しながら施設を待つというようなことになるのかなという点では、とても期待で、私もわくわく期待しています。

ただ一方で、ちょっと心配な点もございます。心配な点というのは、やはり震災復興の部分ですね。やっぱり震災復興の部分という中で、やっぱり被災された皆さんですとか地域ですとか、そういった皆さんは、やはり命ですとか、あとは別れとか、いろんな混乱とか、あとはいろいろ葛藤とか、離別とか、綺麗には括れないことを抱えながら、今も引きずりながら暮らしていらっしゃる方もたくさんおられます。ですので、そういった生々しい複雑なものも含めて、この施設にどういうふう、展示でもあり、人がちゃんと、被災された方や地域が関わりながら展示や企画や研究がされていくかということがとても大事ではないかなと思っています。

そういった震災ならではの人間の営みの本当に土に密着したような部分も本当に考えながら、被災した方が、複合施設に連れていきたいよと被災された方がおっしゃるような、そういった施設になっていくことが大事で、何かあそこはちょっと違うからね、みたいに言われなような複合施設にしていく必要があるのではないかなと思ひました。

加えて、施設として必要な機能の中に活動支援機能というところがあるかと思ひますけれども、こちらにコンシェルジュ機能という言葉が入っているんですけども、やはり様々な要素がありますので、コンシェルジュ的な機能もとても大事だとは思ひますけれども、加えて、やっぱり一人一人の人だったり地域だったり組織だったり、あと様々なテーマでの災害や復興、あと災害文化の切り口がありますので、それらの方々をつないで、そして企画や事業や研究につなげていくという点でも、協働コーディネーター的な人材がやっぱりもう今から活躍していただく必要がありますし、そういった点では、文化と災害と併せて、その相互のよさを深めていくことができるようなキュレーションができる方ということも、さらにそういった担い手の方々も大事じゃないかなと思ひています。

やっぱりつなげて深める、その少し導きをしてくださるような方がいらっしゃらないと、点在してしまうという可能性もありますので、ぜひ協働コーディネーターや、そういった協働ができるキュレーションもできる方ということも、支える人材を今から考えていただけたらなと思ひました。

あとは、今日、状況、立地状況というんですかね、拝見してきましたけれども、景観とか地形ですとか、回遊性などもやっぱりあるということがとても大事に、市民に身近な施設ということで、何かちょっと敷居が高いなという施設ではなくて、市民誰もが気

軽に訪れて、気軽に活用できるという親和性の高いものにしていただいて、ちょっと敷居が高いものにはならないようにぜひ工夫していけるといいんじゃないかなと思いました。

まずは以上とさせていただきます。

#### ○郡市長

いずれも重要な視点だというふうに思います。特に、被災をされた方が心の安寧も図れるような、そういうふうな複合施設であるべきであろうということをご指摘いただいたところでして、重要な視点だったと思います。

それでは次に、梶委員にお話を伺わせていただこうと思います。

#### ○梶委員

そうですね、私が音楽施設のほうにおりまして、専門的なところだと音楽ホールについてになるかなと思いますので、こちらのほうを中心にお話しさせていただければと思います。

まさに、劇場法も施行されまして、もうかなりの年月がたっておりますけれども、なかなか自分たちでつくっていくというところができないホールがまだまだたくさんあるのかなと思う中で、既にやっぱり仙台フィルの活動ですとか、長年やっぺらっしやる国際音楽コンクールなど、土壌がともしっかりしている仙台市だからこそできることがたくさんあるんじゃないかなというふうに感じました。

特に、ここに書かれてありますような人材育成機能というのを、皆さん、きちんと拠点として機能していこうというふうにならなければならぬことはすごく重要なことではないかと思っております。

先ほど遠藤委員の中で、協働のコーディネーターがいないと難しいかもというようなお話があったと思うんですが、まさにそういうところって重要なんじゃないかなというふうに思っております。そういう音楽ホールならではの、音楽ホールといいますか、劇場ならではの人材、コーディネートができていく人材の育成をしながら、専門的なこちらの震災のことのキュレーションができる、学芸員の方なのか分かりませんが、そういうコーディネートができる方、それぞれ専門性が全然違うんじゃないかとは思いますが、こういう方たちがもう当初からできれば関わって行って、お互い意識を高めながら、協働ができるような環境をつくってあげるのがいいのかなというふうに感じています。

東京文化会館では、ファシリテーターといいますか、ワークショップリーダーの育成というのをやっているんですけども、地域の人たち、地域の中で、地域の人たちが参加できるものがないよということももう既にうたわれているんですけども、やはり敷居が高いものになりがちになってしまうと思うので、そうではなくて、一番最初から、ゼロ歳でもいいし、高齢者でもいいし、障害があってもなくてもどんな人でも、いつでも来ていいんだよというような土壌をつくっていくことがすごく重要だと思っております。そういうことを牽引できるような人材の育成を是非していただけるといいかなと思います。それが市民の方たちが担うことによって、やっぱり市民の方たちが気軽に来られるような場所になっていけるんじゃないかなというふうに思います。

今までオペラとかバレエができる劇場がなかったということを伺ったので、今度こういうことができるようになりますと、市民の活動も活発になると思いますし、また、市民ではないけれども、プロの実演家団体の方が来て、そういうのを鑑賞する機会も生まれてくると思いますし、そういうのも皆さん今まで東京に行かなければいけなかったりとか、そういうようなところから、自分たちのところで楽しめることがたくさん増えていくのはすごくすばらしいことだと思いました。

これらを実現していくためには、やはり専門的な人材、それぞれのところに専門的な人材をきちんと配置してつくっていくということが重要なんじゃないかなというふうに思いましたので、そこら辺のところをこれから考えていっていただくといいのかなというふうに思いました。

○郡市長

では、川内委員、お願いいたします。

○川内委員

ご説明ありがとうございました。

音楽ホールとメモリアル拠点という大変一見するとなかなか結びつきづらいものが、この仙台というこの具体的な場においては、両者非常に親和的な性格を持っているんだということは大変よく分かりました。そこで、やっぱり先ほど市長もおっしゃってましたし、あと事務局の方々からもご説明ありました青葉山という立地、これはやっぱりそう考えると大変重要だなというふうにお聞きしました。

というのは、先ほどもありましたとおり、この青葉山って、まさに伊達政宗がこの地に城を築いたところからこの仙台というまちが始まる。やっぱり仙台市民にとって伊達政宗というのはもうもはやアイデンティティーになっている存在、政宗の城である青葉山というのはまさにこのアイデンティティーなわけなんですけれども、そういう場所に例えばメモリアル拠点で目指しています災害文化というものの創造拠点をつくっていくと。それを市民のものにして、社会の中にその災害文化を溶け込ませていくというようなことって、まさに言ってしまうと、災害文化を仙台市民のアイデンティティーまで高めていくという、そういうことだと思っんですね。

と考えますと、この仙台開府400年という形で、政宗が仙台市民のアイデンティティーになってきた。言ってしまうと、災害文化、東日本大震災を含めたこれまでの災害という、仙台の市民と災害との関係というものもアイデンティティーまで高めていく、その象徴的なものとしてこの施設というものが、ちょっと長い時間で考えると、考えられるのかなと。それぐらいのスパンで考えてもいいんじゃないかなということを経験家としては思ったところなんです。

そういうことを考えたときに、やっぱりこの施設というのは、できました、はい、終わりでは、当然、市の側でも考えていない、もっと長いスパンで考えていると思っして、となったときに、やっぱり考えてほしいなと思っしたのは、実は私も、遠藤委員や梶委員と同じ、人材の問題ですね。

遠藤委員や梶委員のお話で、人と人をつなげるような、そういう方がやっぱりいる必要があると。私もそう思っましたし、それと同時に、私は、何ていうか、時間をつなぐ

人というんですかね。例えば震災の伝え方とか、そういうものも、今、震災から11年ということで、まだたくさん当時の経験というものをもち、引きずっているというか、方たくさんいる。そういう方がやっぱりこの場所に来たときに、震災のことについて考えられる、伝えられる、そういう展示施設が必要、展示なり機能を持ったものが必要だということになるわけですが、一方で、これがもっと時間たつ、例えば、恐らくこの施設ができるのは、あと10年かかるかどうかということになると、震災から20年という時間になってきます。

私が仙台来る前にいた神戸では、ちょうど阪神・淡路から20年ぐらいという時間のときにちょうど神戸市民として住んでいたんですけども、その頃になりますと、実はもう市民の半数ぐらいは、神戸市民のですね、震災の経験がないという、そういう状態の中で、いかに震災の記憶を継承するかというのが、大変そこが困難になってきているという問題意識が神戸ではありました。

そのあたりは、多分、仙台も恐らくは、神戸と同じような流動性の高い都市ですので、記憶の継承の仕方って恐らく時間がたつと変わっていくはずなんですね。そういうタイムスパンで震災を伝えて、それを災害文化まで高めていけるような、そういう人材というものも恐らくこの拠点には必要になってくる。キュレーター、学芸員やアーキビストということになってくるかもしれませんが、そういうタイムスパンで変わっていく、そこを見据えた形でこの施設を捉えていく必要があると思いますし、あとそれと、だんだん体験者がいなくなってきた、仙台というのは、特にやっぱり拠点経済都市として、流動性が高いこともさることながら、3年、5年で、仙台に来て、引っ越していくという、そういう人たちも多い場所。だから、3年、5年間だけ市民だという方も多いと思うんですね。

そういう方たちも、この3年、5年という仙台で暮らす中で、この仙台の災害文化、震災の経験というものに触れてもらって、それをまた全国に各地に持って帰るような、だから単に地元の住民体験者、そして観光客のような一時的にやってくる方だけではなくて、そういう中期的に仙台に住むというような、何かそういういろんな人たちがいる種お土産を持って帰れるような、そういう、お土産というのは、要するに震災の経験、災害文化ということですが、何かそこまで見据えた形で、具体的にどういう施設が作れるかということを考えていく必要があるのかなというふうに差し当たり感じたところです。

○郡市長

それでは次に、今野委員にお願いいたします。

○今野委員

なかなか理念というところからすると難しいかなという感じはいたします。ただ、今まで複合施設というふうなことで理解をしていましたので、それを、その機能をどういうふうに融合するのか、共通する部分がどこにあるのかというのは今日初めてよく理解できたなという感じがしております。実はこれがなかなか、市民の方々にどういうふうなこの複合施設と言われたときに受け止められているのかなというのが何となくちょっと気になってお聞きをしておりました。

ですから、これ、例えばなんです、これから細かい部分を詰めていって、ネーミングという段階になっていくのかもしれませんが、先に、複合というよりは融合なんだろうかと、そういうのが表せるような施設自体の名前を考えるのも一つのアプローチの手法じゃないかなというふうに感じさせていただきました。あくまでも私の個人的な考えです。

それと、それぞれについていろんな方々が、特にホールについてはいろんなご意見をお出しになる方いらっしゃいます。ただ、これからおつくりになるというふうなことであれば、やはりこれまで体験したことのないハイグレードな音響を備えた設備であるべきであろうというふうに思いますし、あと震災のメモリアルにつきましては、これから10年たったときに、これまでの震災の体験というのがどういうふうに変化をしているのか。要は、震災のときに生まれた子供が20歳になっていらっしゃるわけですね。ですから、そのときにどうい展示の仕方があるのか。展示をするということになりますと、どうしてもスペース的なものを考えてしまいますので、これを例えば体験ができるとか、それを一つコンテンツとして、観光だとか学習だとか、そういうところの目玉に据えるというふうなことなんかもあってもいいのかなというふうな感じがしております。

ただ、先ほどのハイグレードのホールとなりますと、今度、ちょっと運営問題がどうしても関わってくるのかなというふうに思っておりますので、これからの議論の中で少し学ばせていただければなというふうに思っております。

1回目は以上でございます。

○郡市長

では次に、佐藤委員、お願いします。

○佐藤委員

私は、市民会議とかでもずっと、ホールのことを中心にといいますか、そこばかりを考えてずっと過ごしてまいりましたので、どうしてもそちらに偏るかと思うんですけども、音楽ホールは、実は私、仙台に住み始めて三十数年になるんですが、この三十数年間の仙台での音楽環境だとかホール事情だとか、そういったところと一緒に歩んできているというふうに思っております。旭ヶ丘の青年文化センターができたときには、響きのいいホールができた、すごくうれしかったですし、それから各区ごとにホールができたときには、選択肢が増えたとすごくうれしかったですし、そういった意味では、いろんな施設が増えてきた。

それはとてもありがたいことだったんですが、いざ、今の時期になって、時がたってきますと、やっぱり、これ2,000人規模とありますけれども、これはなぜ2,000人かというと、全国大会規模の合唱とか吹奏楽、それからあと先ほどもお話しらつと出ましたが、外国からの演奏家だとか、それからそういったものが全部、仙台を乗り越えて東北のほかのところに行ってしまうという、これはやっぱり地元に住んでいる人間からすると、じくじたる思いというのがやっぱりありまして、そのところを何とか解決できないものか。

それから、やっぱりいろんなところが、この震災で被害を受けたりすると、一斉に閉まってしまうわけですね。そうすると、我々の演奏する選択肢というのもまた減ってい

くし、その期間中、我々はどういうふうに活動していったらいいかと、そんなようなことがこのところ繰り返しあったという印象がありますので、今回こういうふうに音楽ホールが、またコロナ等で立ち消えになるのではないかと考えていたところが、立ち消えにならずに、先に進む形で今歩み出したことは本当に心からうれしく思っています。

これは私だけではなくて、この地元で音楽をやっている人間、反対の方もいらっしゃるかもしれませんが、大方の人たちはそういうふうに思ってくれていると私は信じておりますので、ぜひ、2,000人でなくてもいいですが、2,000人規模のホールというのは、いろんな障害があるかもしれませんが、ぜひとも進めていただきたい。これは私が生きている間にできなくてもいいです。

(「できます」の声あり)

#### ○佐藤委員

できますか。本当に、これから先の次世代を担う子供たちに今我々がやっぱり必ず残してあげなきゃいけない、そういったものじゃないかと。ここでまた立ち消えたら、何か二度とそれが上がってこないのではないかという危機感も私自身は持っておりまして、そういった意味では、この音楽ホールをぜひとも建てていただきたい、そういう強い思いを持ってここ数年生きてまいりました。

その機能の中には、いろんな、あれですよ、コンサート形式で行うところと劇場型で行うところと、選択肢が幾つかあると思うんですけども、我々というか、私なんかはオペラをやっている、舞台関係をやっている人間なので、オーケストラピットがあって幕があってという、そういうホールでないと、ちゃんとしたオペラができない。そういった事情もあって、それだけでピットを造ってくださいというわけにはいかないんですけども、このあたりでピットがあって演奏会が成り立つところというのはイズミティがあるんですが、音響的にはやっぱり我々演奏するのに非常に演奏しにくい。これは響かない。やっぱり建物というか、ホール自体も楽器の一部ですので、そういった意味でも、音響がきちんと整っていて、そういう設備が整ったところは必ずつくっておいていただきたいというか、今後のためにも、そういうことをぜひともお願いをしたいというふうに、何か総論的なことじゃなくて、具体的な内容と思いになってしまいますけれども、そのあたりを一つ、今予定されているところがその形で進んでいただけるように願っています。

それから、附属するところなんですけど、先ほども地下は使えるんですかとちょっとお聞きしたのは、駐車場の問題もあるかもしれませんが、我々にとって、リハーサルをする場所、それがホールの大きさと同じ空間を取れるような場所というのはすごく必要なんですね。なかなかそういう場所が今確保できなくて、オペラとか、そういう舞台芸術、練習するときに、なかなかそういう空間を探せなくて本当に困っています。ですので、ホール機能の中に、そういうリハーサル室とこうありますが、そういったものが地下に造られるようなことが可能なのであればそれでもいいしというようなことを、いろんなことを思って、ここに、また繰り返しになりますが、このような施設設備がぜひとも完成するように、本当に心からのお願いということで今日はちょっとお話ししたいなと思って参りました。

何か足りないことがあるかもしれませんが、それで、複合施設ということで、ちょっと私自身は、先ほども申し上げましたように、音楽ホールのごことでほとんど考えてきていましたので、震災メモリアルのところの災害文化という言い方がなかなか自分にとってはなじめないで、どういう形でそれを理解したらいいかというのはあるんですが、先日少しお話を伺ったときに、先ほども出ていましたけれども、神戸のほうでも時がたつと、という話がありましたが、仙台には戦災復興記念館というところがありまして、そこもホールと展示室とあって、そこがやっぱり戦争から時間がたってきていて、いつも震災に何か音楽の練習で行くと、その展示室もほとんど人がいらっしやるかいらっしゃらないかという感じだったんですね。

ということは、このメモリアル施設を、震災メモリアルをつくった場合に、それこそ20年ではなくて、40年、50年後とこう考えたときに、それがどのくらい内容を充実させて人が利用できる施設になるのか。音楽ホールのほうも、世界に誇れる、それで100年とかという話もありましたので、そうするとホールのほうは100年、じゃこちらのほうは100年続かなくていいのかというと、やっぱり複合施設としては、いろんな一緒に歩んでいくというようなことが、ぜひともそんな形で出来上がるといいんだろうなということでは思っておりました。

それで、協働のコーディネーターみたいな話がありましたが、私は、私なりの頭で、音楽のほうでちょっと考えていたときに、資料にもありましたけれども、音楽の力による復興センターというところが、音楽のほうと復興のほうと橋渡しをして、いろんな活動を今も続けてくれていますので、そちらを何かうまい形でコーディネーター的なところに使うことはできないんだろうかと、何かそこがつなぎにできないんだろうかというようなことをちらっと思ったということだけお話をして、すみません、何かだらだら長くなったかもしれませんが、以上です。

○郡市長

では、本江先生、お願いをいたします。

○本江委員

本江でございます。

複合するとどうかについては後段でもう一回あるということだったので、今はメモリアルのほうに集中してお話をしたいと思います。

先ほども、ようやくここまで来た感慨深いということを行いました、震災があつてその直後から、本当に直後はそれどころじゃないんですが、ふっと思い返したときに、こういうことが起こりうるともう知っていたのに全然備えていなかったねと、このまままた何十年、何百年後にもう一回災害が来たときに同じことになるのはまずいよねという反省は、率直に現場にいた者の皆の思いだと思います。それで、このことをどう理解して伝承していくのかということが課題だということで、メモリアル等検討委員会、宮原先生の委員会があつて、そこでの議論が行われました。

今日来るに当たって、その当時の、これ公開されていると思いますが、この宮原委員会の報告書を改めて読みますと、今日の資料にもありましたけれども、文化芸術の力を生かしていくのだということが最初からうたわれていて、知り学ぶ機会をつくっていく

のだということが入っていて、「災害文化」という言葉は、当時はまだ見つけていなかったというか使っていなかったんだけど、災害のたびにおたおたするのではなくて、災害はこういうものなんだということをちゃんとのみ込んでおく、そういう地域、都市になる必要があるねということが、報告書の中には入っているんじゃないかなというふうに思いました。

それで、この最初の委員会的时候、丸1年ぐらいやっていて、今でもよく覚えているんですけども、最後に当時の奥山市長が、行政というのは、こういう仕事が始まると早く終わらせたいんだと、きちんとまとめて、終わった、一丁上がりだと言いたい、それが行政の行動の原理というか、そういう癖があるんだ、というふうに言われました。そして、この震災のメモリアルの事業というのはそういうものじゃないということがよく分かりましたと、一丁上がりというふうに言うわけにはいかないんですねということをおっしゃった。

それからまた10年近くかかっていますが、仙台市はその間にさっきのメモリアル交流館をつくったり荒浜小学校を公開したり、今も港とか海のほうでも山のほうでも、被災したところの整備や何かをしながら、細かいところはいろいろ言いたいことはあるんですけども、でも結構着実にメモリアルのことを定着させる事業をやってこられたところは敬意を表したいと思いますし、市民としても誇らしいところだと思います。まずは褒めたいです。

市がやっていることだけじゃなくて、仙台はやっばりすばらしいと思うのは、草の根という言い方をすると上から目線ですけども、すごくたくさんの主体の方が、この震災のメモリアルの活動をいろんな角度、いろんなアプローチでやっていらっしゃる。これが本当にすばらしいことで、それを束ねると言うと、これもまた偉そうな言い方になっちゃうんですけども、そうしたものにきちんと敬意を払いながら、それと協調して、ある拠点性を持った場所をつくるということは、やっぱり被災地で最も大きい都市の責任としてやるべきことだなというのは改めて感じているところです。

それで、中心部の拠点を整備すべきということがこの最初の委員会で言われて、それも立ち消えにならずに、ちゃんと引っ張っていただいて、検討委員会をやって、具体的にどうするかということ野家先生の委員会で議論してきました。これもやっぱり1年ぐらいやっていたんですけども、その中で、災害とともに生きる文化、災害文化という言葉が出てきた。やっぱり聞きなじみのない言葉で、何かごろっとして据わりが悪いじゃないですか。何か楽しそうじゃないし、怖いし。だけれども、ネーミングということもおっしゃいましたけれども、今野委員が、何かあまりすっと流されちゃう言葉じゃない、のみ込みにくい、ちょっとぐっとなるところがいいところだとも思っていて、そうしたことってだってあるじゃんということだと思うんですね。

災害とともにあるために我々はどういうつもりでいけばいいのかという、何かそうしたことをある一人一人の心がけでというだけではなくて、ある地域に文化として定着させていくことが必要で、そのために何をすればいいかってまだ全然分からない。いろんなことを10年やってきていますけれども、これをすれば大丈夫だということが定まっているわけでもないし、時代と状況が変わっていくと、何をすればいいのかということ



もどんどん変わる。災害文化の拠点ですと言っているけれども、これをやれば大丈夫ですという何かタスクリストが安定的にあるわけじゃないというのがみそだと思うんです。つまり今何をしたらいいのかを常に考え続けるような場所をつくる。

だから、あまり簡単にこういうことをしますというリストにはならない。これから何か計画をしようというときに、何をすればいいのか分からないですというのは無責任かもしれないが、でもそういうものなので、都度、今何をしなくちゃいけないのかというのを考え続けていけるような場所にするという、何かそういう面白さと難しさがあるというふうに思っています。

もう一つ、音楽のためのハッピーな場所に、これあえて言いますが、震災の伝承施設があって、展示もする。それはきらきら楽しいものではないですよ。だって、つらい事実を突きつける場所でありますから。そうしたものがあるということはどう受け止めたらいいのかということがあるとは思いますが、ただ、委員会でも話をしていましたけれども、何か憂鬱なものを突きつける、あるいは、あえて分かりやすく言うと、お墓を造ったり慰霊碑を造ったりするようなこととはちょっと違うのだという話は繰り返して、災害文化のための施設だと言っています。

それはどんなものですかというと、時々説明で僕も言っていたのは、例えば広島のパークがあります。8月6日にはビシッと非常に厳粛な儀式が行われる場所で、誰もが襟を正す空間になる。そのための建築的にも非常に優れた仕掛けができていますが、普段は本当にまちの真ん中の穏やかなセントラルパークとして機能している。だから、これはいわばモードの問題だと。おちゃらけた場所にはもちろんできません。できないんだけど、でも、いつもしかめつらくうつむいていなきやいけないかということではないはずで、何かそうしたモードを切り替えながらいられるような場所として構想するというのが必要で、そのための空間を考えるということになるんだろうなというふうに思っています。災害とともにあるために我々はいかにあるべきか、ということを中心に問いつけるような施設。

10年たっていますので、仙台だけではなくていろんなところに伝承施設が、この数年ですかね、ようやくと言っていると思いますけれども、国のものから市町のレベル、あるいは民間のものや何かたくさんできています。そうしたものとも連携をしながら協調してやっていく施設になるべきだと思いますけれども、それらの中で、ちょっと違うところを、ユニークなところを仙台で持つとすると何か。一つあると思うのは、そうした施設の多くが、脅かしているんですね。このままだと、ぼんやりしていると、あなたは次の災害のときに大きな被害に遭う、だから忘れないでおきなさい、備えておきなさい、ぼやぼやしていると大変な目に遭いますよと言って、怖がらせるというか、脅かして行動を促すという形にどうしてもなりやすい。けれども、それだけだとやっぱりちょっとつらいので、何か違う言葉遣いとかトーンで震災のことを伝え、もちろん恐ろしいんだということはもちろん言うんだけど、そのときにどうしたらいいと思うかということ何か違うトーンで働きかける必要があるなと思っています。メモリアル等の委員会のときでも、そのことには随分腐心をして、災害とともに生きる拠点を考えようという言い方は、災害の恐ろしさを後世に伝えるということとはちょっと違うトーン

でいいんだということを言っているつもりです。

なので、複合については次のターンで話したいと思っていますが、その意味でも、音楽ホールと一体でやるというのは、何か違ったトーンというものを具体化する際のすぐよい可能性があるのではないかなと思っていて、僕は非常にポジティブに考えています。後段ではそれを話したいと思いますが、何かそういうものとして考えたいなと思います。

ちょっと長くなってすみませんね。最後に、一つの樹のようなものとして考えましようというのが、その前の中心部メモリアル委員会の使ったメタファーです。何か樹のようなものである。大きな樹の姿で見えて、大きな枝ぶりがまずは見えていて、その下に木陰の気持ちのよさそうなスペースがあるので、みんながそこに集まってくると。でも、その下に行くと、枝の広がりや木漏れ日はいいんだけど、太い安心できる幹があって、ということはこの下に大きな根があるというのが行けば分かる。分かるけれども、それを突きつけてくるようなものとはちょっと違う。何か大きな樹のような場所、自然と人が来て、思い思いのことをしていてもいい、いろんな、リスがいたり鳥がいたりしてもいいという、何かそういう場所として考えたいという、その辺の気持ちを何とか表現しようということで、樹のメタファーで表現しています。

何かそうした結構新しいタイプの伝承施設の在り方を考えようというか、発明しようとしているので、たくさんできているものとちょっと違うものでないといけないし、仙台市にもう一個できたねということとはやっぱりちょっと違うものとして考えたいというふうに思っていますという感じですかね。ありがとうございます。

○郡市長

それでは、本杉委員にお願いをします。

○本杉委員

本杉です。

この表の上段をまず話して、その後、あり方・目指す方向性ということですね。

私が、先ほど紹介いただいた交流ビジョンの策定検討懇話会で話された3つの点の、とても心強く感じたんですね。都心近くの自然と文化がある場所、都心近くというところも、東京の人から見ると、都心でもいいんじゃないかなと思うくらい近いんですが、地下鉄ですぐですから、もう一つの2つの特別な場所とか、それから上質な時間というようなキーワードで話されたこと、これはとても僕はすごくいいなと思っていまして、この特別感とか上質感というのは、文化にとって非常に重要なキーワードだというふうに思っています。また、そこで話された多様なストーリーが持てる場所とか時間とかというのも、とてもすばらしいキーワードを示してくれたなというふうに思って、これからこの場所で、この場所というか、今回の場所があるところ、その中の一部ですけれども、計画するに当たって、一つの重要な視点じゃないかなというふうに思いました。

この音楽ホールと震災メモリアルの両方の話をまとめて並列的に聞いていて、共通するのが創造とか未来志向とか、あるいは広場という言葉で、それらをやっぱり考えてみると、都市は文化によってつくられるという、改めて考えさせられることだなというふうに思っています。

それで、特に音楽ホールに寄ってちょっと話をしますと、文化芸術の持っている力というのは、大ざっぱに3つほど挙げるとすると、1つは、自分が楽しむだけじゃなくて、ほかの人に喜んでもらえると、これは非常に重要な力で、社会をつくっていく上でかけがえのない力だなというふうに思っています。それから、人々の交流を促して人々をつなげていく力、これもやっぱり特徴の一つとして持っている力じゃないかなというふうに思っています。もう一つが、人々が力を合わせてあるプロセスを継続的にしていって創造に結びつけるという、これもやっぱり文化芸術の持っている大変特徴的な力じゃないかなと思っていて、こういった意味で、2つの施設が協力し合って一つの方向性を持っていくようになるというふうにお話を聞きながら改めて思ったところです。

それにつけて、こういう話をするとつい思い出しちゃうのが実はチャーチルが言った言葉で、日本語で言っていないので私の理解が間違っているかもしれませんが、「人は、得るもので生活をして、与えることで人生をつくる」というような言い方をされていて、それがまさに文化の重要なところで、コミュニティーをつくっていく上で、コミュニティーをつくっていく、形成していく上で、かけがえのない我々人間が持っている特徴的な活動じゃないかなというふうに思っています。

それらが、音楽なり震災メモリアルというような場を持って、融合していく方向性が見つかればいいなというふうに思っています。

以上です。

#### ○郡市長

既に委員の皆様方からは、それぞれの施設の目指す方向性について補強していただいたばかりでなく、複合という形についても言及もいただいたところではありますけれども、改めて資料5の下段にあります複合施設としてのあり方・目指すべき方向性についてご議論をいただきたいと思えます。

時間もなかなか限られているものですから、大変恐縮なんですけれども、どういうふうに目指していくべきなのか少しおまとめいただいて、また同じように、遠藤委員から席順でお話をいただきたいと思えます。できれば、後半で少しいろんな掛け合いというのでしょうか、それぞれの委員の皆様方のお考えについてディスカッションができる時間も取りたいというふうにも考えますので、ぜひよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

では、遠藤委員、お願いします。

#### ○遠藤委員

一番下の目指す方向性のところですよ。

先ほど本江先生が、一番最初のメモリアルの検討委員会のときに災害文化という言葉は出ていなかったけれどもということでもちょっとお話しされて、その中に「知る」という言葉があったかと思うんですね。今載っている言葉というのは、全ての項目が結構未来志向な言葉が並んでいるんですけども、やっぱり今までの仙台を知る、あと過去の災害を知ることにも入っていますから、だから、自分、仙台を知っているようで知らなかったりするんですね。友達が来て聞かれて初めて仙台のことを勉強し直したり、よくあるのが、杜の都・仙台なんだろう、何で杜の都っていうのなんていうのも、や

っぱり質問してもらうから市民の皆さんは、何で杜の都、定禅寺通に木があるからかな、みたいなことではなくて、また文化を知るといふことに向き合えると思うので、何かもうちょっと土台に近いような言葉も、「知る」という言葉がいいのか分からないですけども、未来志向の手前の土台を、過去の災害も含めてといふことでしたので、そういった言葉が入ってもいいのかなと、土台を確認するような言葉が入ってもいいのかなと思いました。

そういう点で、イノベーションというハッシュタグをつけていただいているんですけども、クリエイティブぐらいまででもいいのかなといふか、イノベーション、何かあまりもっと、何ていふんですかね、もちろんクリエイティブのところからイノベーションといふのにもつながっていると思うので、少し土台につながるような言葉もこのハッシュタグのあたりであっていいのかなといふふうに感じました。

以上です。

○郡市長

それでは、梶委員、お願いします。

○梶委員

先ほど本江委員のお話を伺いまして、私も改めて、ここにたどり着くまでのことをイメージがすごくしやすかったなといふふうに感じました。

そうですね、先ほど本杉委員のほうもおっしゃっていたような、特別なエリアであったりとかといふところってとても大切だよなといふお話もありましたし、佐藤委員のほうも、子供たちのために残してほしいんだよといふお話もありましたけれども、やはり特別な場所ではあるけれども、やはり日常の一部になってほしいなといふふうに感じました。

私たちにとって敷居が高い場所であるべきではないと思いますし、本当に子供の頃から、特別な場所ではあるけれども、日常的に来て、来ることを拒まれないような場所であってほしいなといふふうに感じておりますので、そのために何をしていったらいいのかといふことを考えていくのがこれからの仕事かなといふふうに感じました。

以上です。

○郡市長

それでは、川内委員、お願いします。

○川内委員

今、委員の皆さんのお話を聞いて、複合といふところで、実は先ほど佐藤委員が言われた戦災復興記念館のことは僕も実は頭に浮かんでいまして、以前、事務局の方にちょっと大学に来ていただいてお話を伺った際も、実は、言ったらホールと展示といふことでいうと、ある種、復興記念館って一つモデルとしてあるんじゃないですかねみたいな話をした記憶もあるんですけども、一方で、佐藤委員のお話だと、なかなかその戦災のほうも、ホールは使っているけれども、戦災のほうもどうもうまく継承できていないんじゃないかといふような課題意識のお話をされていましてけれども、そうなんですよね。片方は存続しているけれども、片方は何かよく分からないけれどもついているみたいな、そういう話になっていっては駄目で、本当に両者が一体となっていくといふこと

が施設としては必要である。

となったときに、先ほど今野委員のほうが、複合か融合かという、そういう話をされましたけれども、そのあたりちょっと真面目に考えてもいいのかなと。今のところ複合施設というふうに言っていますけれども、両者をやっぱり一体融合のものとして、それぞれ必要な機能はありますけれども、そういうものとして考えていくということも少し、今後、委員会での検討の中で必要なんじゃないかなというふうに感じました。

以上です。

○郡市長

それでは、今野委員、お願いいたします。

○今野委員

先ほど何かこの2つ目の課題のところまで踏み込んでしまってすみません。

この一番下の部分ですね、目指すべき方向性のところ、やっぱり我々の立場からしますと、この3つ目のところが一番重点を置かせていただかざるを得ないかなというふうに考えています。

やっぱり先ほどホールをハイグレードのものにしたほうがいいんじゃないかというご提案もさせていただいたんですが、やっぱり各地で2,000名規模のホールというのは東北を見てもできているわけですね。その中で、やはり東北の拠点性であり、あとは少子化の中で仙台の位置づけを明確にしていくというふうな意味からも、やっぱりほかの都市がつくられているのを十分検討された上で、いいものをつくっていったほうがいいんだろうなというふうに思っています。

それと、皆さんの中にもおっしゃっていらっしゃいましたが、特別な場所というふうな位置づけだけでは駄目なんだと思うんですよ。ですから、やっぱり普段から行って、それなりの時間、空間を楽しんで、そして周り、青葉山エリアという本当に選ばれた場所なわけですから、これをどういうふうに活用していくのか、その中で、この複合施設がどういう位置づけ、機能を発揮すべきなのかというふうな視点というのが必要なのかなというふうに思っています。

そういう意味で、青葉山ビジョンのところでもご検討されていらっしゃいますが、例えばほかの施設の機能とどういうふうに結びつけるかとか、そういうことも一方で考えてもいい。例えば、簡単な話ですが、ホールの向きだとか何かをつくる時に動線をどういうふうに確保していくかとか、そういうことを一つ取っても、周りとの連携というのはやっぱりあっていいのかなというふうに感じております。

以上でございます。

○郡市長

それでは、佐藤委員、お願いいたします。

○佐藤委員

先ほど、震災メモリアルのほうはなかなかイメージが自分の中で湧かないと思っていたんですけども、本江委員のお話で、立地については、モードの問題とか、ほかの地域にないものをつくっていくように考えているというようなことで、何かイメージがこれからできるかなというふうなふうに思いました。

どちらにしても、子供から大人まで、あとは障害を持った方から、先ほど震災で心を痛めた方々から、どなたでも常に集えるような、そういう空間をやっぱりつくっていききたいというふうには思っています。どういう形でつくれるのかというのは、まだ今はアイデアありませんけれども、そういう場をやっぱりつくっていく方向で考えていきたいというふうに思っています。

以上です。

○郡市長

それでは、本江委員、お願いします。

○本江委員

じゃ、複合についてというところですが、先ほども言いましたけれども、このメモリアルのほうは、災害とともに生きると、そのために我々はどうのように行動するべきかということ、それは決まった答えがあるわけではないですから、もう分かっていることを教える施設じゃなくて、どうしたらいいかみんなで考え続ける施設なので、そういうものであると。

そして、これを市がつくるので、新しいタイプの行動規範をつくるというか、行動の形を文化として創り出して、実際に行動を変えていかないといけないので、そのための啓発もするし、もっと言えば、仙台市のいろいろな施策の中に災害文化をどう織り込んでいくかということを考えていかなきゃいけない。仙台市が何かやるたびに、災害文化の観点から見てこれはどうかというチェックをして、いいねと、さすが仙台だねというふうなふうに何か使われる。災害文化の面から見てこれはどうかということ判断するある種の鏡として機能するという、そういう役割を果たすんだと思うんですね。とまあ、観念的に言うけれども、何のことだかまだよく分からない。災害の研究所が東北大学にもありますけれども、これが災害文化ですとまだ言えないので、そこはだから問い続ける場になるんだということだと思うんです。

もうちょっと具体的な話をしますけれども、こういう新しいタイプの行動を具体化して市民に定着させるための施設というのは、決して特別なものではなくて、実は、今までも何度もやってきている。例えば、戦災復興記念館はいまいちという話がちょっと出ていて、それはもちろん巻き返さなきゃいけないと思うんだけど、僕が思っていたのは、例えば、男女共同参画という新しい政策課題が出てきたときに、仙台市はエル・パークやエル・ソーラというのをつくっていて、その面白いのは、デパートと一緒につくっているんです。デパートの一番上にあるみたいになっている。新しい文化のネットワークが必要である、それはオーソドックスな美術館とちょっと違うのが要るよねとなって、せんだいメディアテークをつくったときには、図書館と一体でつくっている。いろいろあるけれども、でも図書館と一体として、それをもう一皮ふくらませて、せんだいメディアテークをつくってきている。

今回、災害文化というものを考えるときに、災害文化だけ取り出して、これですと言うことが難しいときに、今、音楽ホールと一体でつくってみてはどうかというふうにしようとしている。これは結構面白いやり方じゃないかなと思うんですよ。何か大事だということはみんな共有できるけれども、新しく小さくて弱い文化を立ち上げていって

育んでいかなきゃいけないときに、それを野に放っちゃうとすぐ死んじゃうので、図書館とくっつけるとか、音楽ホールとくっつけるとか、デパートに行くとそれがあるよというふうにすることで、何かインキュベーションしていくとか、育てていくみたいなやり方というのをこれまでもやってきている。これは割とうまいやり方ではないか。仙台市民には、仙台は市民協働のまちだというプライドがあるんです。その自負にふさわしいカップリングをして、そういう場をつくっていこうというのはなかなかいいし、実績もあるし、今回もそういうふうにするのは面白いやり方じゃないかなと。言うなれば、仙台方式で新しい文化を創る、今回のテーマは災害文化ですという、何かそういう言い方というのできるのかなと思っています。それは割とポジティブな在り方かなと思うということですね。

では、それを誰がやるのかという人材の問題は皆さんがご指摘されたとおりで、それをどういう組織でやるのかということですが、公共施設は、今の文脈で言うと、オーソドックスでやるのがきちんと分かっているタイプの公共施設もあるし、これからつくろうとしているもののように、どうしたらいいのか分からないからいろいろ探索しながらやっていくタイプの公共事業というのもあります。そっちってやっぱりちょっと運営のモードというか、乗りが違うと思うんで、何かその探索的なことをやるタイプのグループというか、チームでつくるといった方がいいんじゃないかなと思っています。

だから、例えばメディアテークをつくったときの事業団の在り方とか、そうしたものの、僕も詳しくその組織構成を知りませんが、何かそういうオーソドックスな施設をきちんとやるということとはちょっと違うチーム編成があつてしかるべきではないかなというふうに思うということが一つ。

それから、冒頭で、いい建築ができるのが楽しみですということを行いました、災害は、まさに今、世界的なトピックでもありますし、パキスタンで水害が大変なことになっているとか、いろいろありますよね。ディザスターカルチャーセンターを仙台でつくると、しかもオーディトリウムとコンプレックスになるらしいというのは結構キャッチーなテーマ設定なので、これは期待ですけれども、国際的な建築のコンペをやって、どういうものであるべきかということ問うて、それが注目を集めるということでもあるし、実際に世界中の知恵を集めるということとか、災害の文化ということはどう考えたらいいのかという世界的な議論を起こしていくというのはどうでしょう。建築のコンペは建築業界の中の話かもしれないけれども、結構波及力がありますし、そのときに、いろんな議題、話題を起こすことができると思うので、ジャストアイデアですけれども、何かそうした形で盛り上げていって、淡々とやって一丁上がりにならない、また繰り返して言いますが、何か大ごとにしたほうがいいんじゃないかということをおもひまして、複合してやる、そして災害文化と冠するホールを持つって結構面白いと思うんですね、外から見たときに。それは大事な課題で、そういうやり方があるのかというふうには世界中の人が思う問いかけをすることができると思いますし、仙台にはその資格があると思います。

そんなところでしょうか。ありがとうございます。

○郡市長

それでは、本杉委員、お願いいたします。

#### ○本杉委員

ここに書かれてあることというのは、それぞれ目指してほしいことなので、私はこれをどう実現の方向に向かってやっていったらいいのかなということについてちょっと考えたんですけども、3つほど考えて、1つは、上にいろいろ必要な機能とかが書いてありますけれども、それぞれの違い、施設使用の違いというものをどう調整していくのかというのは一つ我々がわきまえていかなきゃならないことかなというふうに思っています。

ホールは、どちらかというと継続的なんだけれども、時間がある程度限定されている。例えば練習室なんかは一日中使うということも特別なときはありますけれども、普通はそうじゃなくて、あるいは毎日連続的に使うということも日本の場合は普通なかなかないことです。連続的だけれども、時間限定で使われていくという組立てになっているのに対して、震災メモリアルで、特に展示なんかはずっとある期間使われるわけで、その間ほかの、何といいますか、利用ができなくなってしまうような室というのは必ずできてしまうという点ですね。これらをどうやって調整していくのか。

それから、2つ目は、広場的な空間というのは両方に求められているわけですが、ホールの場合は、先ほど特別なという話をしたけれども、別に特別というのは敷居が高いという意味じゃなくて、ほかにないか魅力的なという意味なんですけれども、ホールのほうは、どちらかといったら、ほかの委員の皆さんも言っているように、楽しい感じというのはとても大事で、静かでシーンとしているようなことじゃなくて、わいわいしていいわけなんですね。静かなときも必要ですけども、基本的にはにぎやかでいいと。一方、震災メモリアルのほうは、どちらかというとき非常に現実的なものを見せる、あるいは認識してもらおうような場所に多分なってくるんじゃないかなというふうに思っているので、その空間利用の違いというものをどう調整していくのかというのが一つ考えなきゃならないことかなと思っています。

3つ目が、これは両方に関係すること、両方の課題だと思うんですけども、この施設に何か全てを求めないという、当たり前なことなんですけれども、市内の他の類似施設でできることは、あるいはまだできていないかもしれないけれども、そこを利用すればできるようなことはそちらに担ってもらおうというような、ここでしかできないこと、ここでしかやれない活動、そういうものを中心的にやっていくことで役割分担していくということですね。

全体としてどういうことかといったら、要するに、せつかく複合あるいは融合するわけなので、共通で使えるところはなるべく共通で使っていく。規模を大きくしない。規模を大きくしてしまうと、どうしてもいろんな問題が出てきますので、そうすることによって、この施設を実現の方向に向かって行ってほしいなど。

佐藤委員が、自分が生きていなくてもいいとおっしゃったけれども、僕は、むしろ生きてい間にやってほしいとぜひ思っていますので、この中では僕が一番年寄りかもしれませんが、だから、そんなふうに思っています。

以上です。



○郡市長

それぞれの委員の皆様方にご協力をいただきまして、コンパクトにまとめてご発言をいただきましたけれども、幾つか大切なキーワードが出てきているんだろうというふうに理解をいたします。

仙台であるからこそ、この複合なり融合なりという施設をやはりつくれるんだという、ここの意味合いというのはとても大きいものがあるのだと私は思っております、ぜひ仙台の魅力を掛け合わせた、そんなところにしていきたいというふうに考えているところです。

今、お話の中には、そういったことも含めてお話をいただいたかというふうに思うんですけれども、どうでしょうか、少しディスカッションをしていただけますでしょうか。さらにこういうふうな考えもあるのではないかと、あるいはご発言いただいたところを補強されたいという方いらっしゃれば、ぜひご発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、川内委員にお願いします。

○川内委員

すみません、少し、本杉委員の今のお話と、あと本江委員のお話で、ちょっとお聞きしたことで考えたんですけれども、まず本江委員がおっしゃった人材ですね。この施設というのがやっぱり何をこれから目指すという、そういうところから考え続けなきゃいけないという、となると既存の枠組みとはちょっと違った人材が求められるんじゃないかというお話なんですけれども、そのとおりにかなと思いつつも、一方で、やっぱりある程度、何ですかね、展示であったり、アーカイブといったときに、ある程度やっぱり専門性というの僕が必要かなといったときに、やっぱり専門性を排除するような形というのはちょっと、むしろそういう人も併せて、様々な多様な人材をこの施設に関わらせていくということが必要かなと思ったときに、ただ一方で、今、本杉委員のお話を伺ったときに、必ずしもそれをこの施設だけでやる必要はないというのは、この青葉山エリアでいうと、過去のことを知るということである、やっぱ仙台市博（仙台市博物館）があって、その仙台市博との連携というのが一つある。

だから、今は仙台市博というのは、この仙台市の歴史というところでいっていただけますけれども、そこに本江委員が言ったように、災害文化というものを仙台市の歴史を捉える際の一つのコンセプトとして導入していくと、仙台市博の今いる学芸員等の専門性というものを災害文化を捉える際の専門性に使えるとか、またあと、今、仙台市では公文書館のほうの設置も準備を進めておりまして、そういうところのアーキビストと災害文化、そのアーキビストの専門性と災害文化の関係というものの知識とかをこの施設のところに持ってくるか、そういう市が持っているそういう専門的なスタッフ、それと災害文化との関係をこの施設に集約していくという、そういう連携のさせ方もあるかなというので、この施設だけで考えないで、もっと広い、仙台市全体の持っている専門性というところを使っていくといいのかなというふうなことをお二人の話から思ったところでした。

○郡市長

じゃ、本江委員、お願いします。

- 本江委員 川内先生言われたとおりで、分からないからといって、何か素人が集まってわちゃわちゃやっていたって何にもならないので、一つ一つの能力というか、タスクをやる能力は必要です。この野家委員会の報告書でも、例えば、ディレクター、コーディネーター、片仮名ばかりですけども、リサーチャーがいて、キュレーターがいて、エデュケーターやファシリテーターがいて、アーキビストもいると。本当に片仮名ばかりですけども、何かそれぞれはやっぱりプロでないと駄目だし、でも、ただ立て籠もるタイプのプロじゃなくて、それがほかの既存施設とのリンクを、だって向こうはプロなんだから、それを受けるこっちの人もちゃんと分かっていないと駄目ですから、一人一人がそういう能力をちゃんと持っていて、ただ、今までとは何か違うことをやるチームになっているという何かその階層的なイメージが必要かなと思います。

野球のチームですとかバスケのチームですみたいなのはまたちょっと違う。これは何のためにこういうチームが要るんだろうなという感じになるかもしれないけれども、でもそれを考える災害文化のチームをつくるというのがこれだし、それは一緒に音楽ホールがある、そのホールの専門家と一体でやるということについても、これは多分独特の能力が必要だと思いますので、何かそうしたセットで、そういう人はどこかにいるから連れてくるみたいに簡単にいかないと思うので、早いうちからチームづくりは、建物なくたってやることはもう始まっているから、そういうのを早く始めるということが必要かなと思います。

- 郡市長

では、本杉委員、お願いします。

- 本杉委員

どちらの施設にも、ここで書かれている内容で言いますと、音楽ホールはシンボル、あるいは新たなシンボルと書いてあったり、あるいは震災メモリアルのほうでもシンボル機能とかモニュメントという言葉があって、これが何ていいますかね、何か彫刻的な何かシンボルを作るとか、あるいはモニュメントを作るとかというんじゃないで、活動そのものがやっぱりシンボルになっていく、モニュメントになっていく。

そういった意味で、今日皆さんが、今、本江委員もお話しになったように、導入部で遠藤委員や梶委員もお話しになったように、皆さんそうですけれども、人材というんですかね、これを運営していく人をどういうふうに、今、特に震災メモリアルのほうは、ちょっとぱっとはどんな人が要るか僕には分からないんですけども、なかなか大変だと思うんですよね、ホールのほうも大変です。そういった人材を早い段階から目星をつけてと言うと変ですけども、協力してもらって一人として、連絡取っておくかということとはとても重要だというふうに思っています。

もう一方、先ほど来、本江委員がおっしゃっているように、建築も文化ですから、まさにユネスコの世界遺産なんかも、建築って、みんな文化遺産としての重要な、観光にもなる目玉商品と言ったら怒られちゃうな、目玉なので、建築そのものがやっぱり文化として、それこそ象徴されるような、シンボルになるような、そういうものになってほしいなというふうに思うんですね。そういった意味で、本江委員の言っているこ

とはぜひ実現の方向に向かっていってくれるといいなというふうに思います。

以上です。

○郡市長

そのほかには何かありますでしょうか。

(発言の声なし)

○郡市長

大分白熱した議論だったというふうに思います。そういう状況の中で、どんなような形が望ましいのかということ、また次回、いろいろテーマを絞ってお話をさせていただこうかと思えます。

いずれにいたしましても、基本構想につながる大変重要な議論になりますので、今日も私もここでお話を伺っていて、とても胸がわくわくする部分もございましたし、どのようなものが出来上がるんだろうという期待も大きくなってまいりました。さらに委員の皆様方には、ぜひ構想を練っていただければありがたいなというふうに思ったところでございます。

少し時間が押してまいりましたものですから、まだまだお話し足りないという方もいらっしゃるかもしれません。事務局のほうに、こういうことはどうだろうかということで、ぜひご意見を文書なり、また別途お話しいただければありがたく存じます。

今日の議論を出発点にしまして、次回、複合施設、融合施設の理念についてと、それからまた、この青葉山エリアに立地をする施設としての在り方について、絞ってお話をいただければと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

では、私の進行はこれで終えたいと思います。

今日は本当にご協力をいただきましてありがとうございます。

事務局にマイクを渡します。

○司会

委員の皆様、ありがとうございました。

次回の懇話会でございますが、10月下旬から11月の開催を予定しております。別途ご連絡の上、日程調整をさせていただきます。

それでは、以上をもちまして、第1回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会を終了いたします。

本日は誠にありがとうございました。

以上